冬至とクリスマス

冬至にかぶせられたイエスの誕生日　冬至とクリスマスの祭りは、元をただせば同根だったと各種の書物に記されています。このうち冬至の祭りが重要な節目であったことについては、まず問題なく納得されるところかと思います。日本民俗学の折口信夫によれば、稲の収穫祭や大嘗祭が年末のこの時期に集中することは、冬至に合わせた日取り設定だったからだとされています。さらに冬至を挟む前後数日間に各地で開催される大市は最も活況を呈したものだったと記されています。現代の感覚でいえば歳末大売り出しですね。稲の収穫を終えて一段落したタイミングで開催される各地の大市と、ボーナスを支給されサラリーマンの懐が潤ったタイミングとも重なってくる、というわけです。

また古代中国では、皇帝みずからがとりおこなう郊祀祭のうち、天を祀る円丘祭は冬至に照準が定められたといわれます（一方、地神を祀る方壇での祭は夏至でした）。沖縄八重山地方では御嶽に女性司祭が集い、祖霊を招き交歓する祭りの日取りも冬至だったと伝えられています。

こうした東アジア各地の冬至祭とヨーロッパのクリスマスの日取りはなぜ一致するのでしょうか。ここ数年抱き続けてきた疑問でした。しかし最近になって、両者が交錯する経緯を記した解説書をみつけました。『よくわかるクリスマス』2014年刊（教文館）です。古代西洋史学の研究者による一般向けの著作ですが、編著者のひとり波部雄一郎氏は、「古代ギリシア・ローマの宗教とクリスマスの誕生」（同書26–37頁）と題する同書の掲載論文において、私の疑問に有益なヒントを与えてくれました。

波部氏は古代ローマ期におけるキリスト教の公認が西暦４世紀初頭だったことと、そのとき帝国下の市民の間では、ミトラス教と習合した太陽神への祭りが定着していたこととの関係に着目します。この太陽の復活を祈る祭りは冬至に開催され、戦車競技や剣闘士の闘いなど、皇帝が主催する各種の享楽に市民は熱狂し、夜半になると熱気にあふれた酒宴へと移行する祭りを心ゆくまで楽しんだようですが、その渦中でのキリスト教の公認でした。

ローマ帝国の支配下、数多くの殉教者をだすたびに異教徒に対する非寛容さも増幅されてきたはずのこのタイミングでの公認だったのです。そのため異教徒が熱中する冬至の祭りとどう対処すべきか、それが禁欲を旨とするキリスト教徒側にとっての懸案となり、その解決策は、冬至に併せてイエス・キリストの誕生祭を創作し、不敗の太陽神の祭にぶつけることであった、と述べるのです。

この決定は、時の皇帝コンスタンティヌスの指示だとの説が有力ですが、じつはそうだとばかりは言えず、信徒の心をキリスト教につなぎ止めておくための仕掛けだった可能性があるというのです。古代ユダヤ教やキリスト教にはそもそも誕生日を祝う習慣がなく、西暦３世紀までに記された経典類や史書には、イエスの誕生日は春の４月、あるいは５月ともあって曖昧なのに、公認後の４世紀以降になると唐突にイエスの誕生日は12月25日だとして確定される。そこに作為を読みとり、上記の推論となったわけです。

なお25日という日取りですが、当時採用されていたユリウス暦などローマ時代の暦では冬至を12月25日と定めたことによるようです。その日取りが固定された結果、現在の暦における冬至（12月21日もしくは22日）とは数日のずれが生じることになったというわけです。

波部氏の論文を通して、私もようやく疑問を解消する糸口を見いだせた気がしています。しかしそうはいっても波部氏の結論部分には納得できません。コンスタンティヌス帝によるミラノ勅令（キリスト教公認—303年）からニケーア公会議（正統の確定–325年）までの一連の施策をみれば、皇帝自身がキリスト教に肩入れした事実がわかります。エルサレムに聖墳墓教会を建てたのも、ほかならぬコンスタンティヌス帝だとされています。だとすればイエスの誕生日が決定されるまでの経緯について、皇帝の関与を考慮しない推測には無理があるといわざるをえないのです。つまり当時のローマ市

民を覆う享楽の渦からの脱却と社会改革を目指すにあたり、キリスト教が有効であるとの判断が伴ったはずの彼の場合、イエスの誕生日を冬至の祭りにぶつけることは、充分ありえる選択肢だったと思うのです。公認後の布石になるからです。

図１ トルコ・リキア地方ゲミレル島の位置

このようにみてくると、やはり定説どおり張本人は時の皇帝だったとみるのが妥当かと思います。ですから波部氏の論考の意義は、異教徒の祭りに惹かれ堕落しかねない信者への苛立ちや、常に離反を怖れる教団側の視点に沿ってこの問題を捉え、冬至の意味を浮き彫りにしたことにある、といえるでしょう。

サンタクロースと初期教会遺跡　ところで、クリスマスと切っても切り離せないのは、イエスではなくサンタクロースです。モデルとなった人物は、キリスト教公認前後の西暦４世紀に現在のトルコ・リキア地方を拠点として活躍した聖ニクラウス（ミュラのニコラス）だったとも、西暦６世紀に同地で名を馳せた別の聖ニコラウス（シオンのニコラス）だったともいわれます。ややこしいですね。

ただし後者の聖ニクラウスとは、じつは私、少しだけ縁があるのです。彼が本拠地にしたと伝える教会跡が地中海に浮かぶ小島、ゲミレル島とカラジャエレン島に残されており、それら教会跡地の地形測量に参加したことがあるからです。大阪大学ビザンツ美術史の方々からの要請のもと、現地調査には考古学の助人が必要だということで、1992年の夏には私にも声がかかり、約１ヶ月半にわたる測量調査に従事したのです。

図１はGoogle Earthからとった関連地図です。ゲミレル島はトルコの南西部、リキア地方にあります。そして図２の上段には、同島に遺存する４基の教会聖堂跡を示しました（中谷功治2014、上掲書43頁）。

後藤明先生の著作『天文の考古学』でも触れられているとおり、古代のキリスト教会は東向きに建てられたといわれます。ゲミレル島のそれはローマ帝国による公認から２世紀後の教会跡ですし、ほかならぬ聖ニクラウス（シオンのニコラス）との因縁が深いとされる教会です。地元民による島の名称も、古くから「聖ニコラウスの島」だったことがわかっています。ですからこの問題を検討するうえで貴重な考古資料であることは間違いありません。

図中の第３聖堂が島の最高所に建てられた中心建物です。半円状に突出した部分がアプスと呼ばれる聖堂の正面ですが、たしかに東方を向くことが確認できます（図が小さすぎて申し訳ありません）。しかし厳密な意味で真東を向くのかどうかが不明です。

GPSなどなかった時代に平板測量をおこなっただけですから、図は磁北にもとづいて作成されました。そのため真北を基準とした図に傾け直す必要があるのです。とはいえ1990年の磁北極に関する位置情報を探るのはやっかいなので、今回は次善の策としてGoogle Earthに頼ることにしました。図２の下段がそれです。あくまでも予備作業の所見ですが、第３聖堂の軸線は真北から80度–83度の範囲で東に傾く、つまり聖堂は真東より10度弱北に振れる軸線に沿って建てられたといえるようです。もちろん、ここから先は大阪大学に保管されているはずの原図に立ち返っての検討作業が必要です。

なお島の最高所にある第３聖堂からみた年間の節目となる日の出方位を点検してみました。図３がそれです。建物の正面観（赤線）は東方の岩山の鞍部に向けられており、その鞍部は、強いていうな

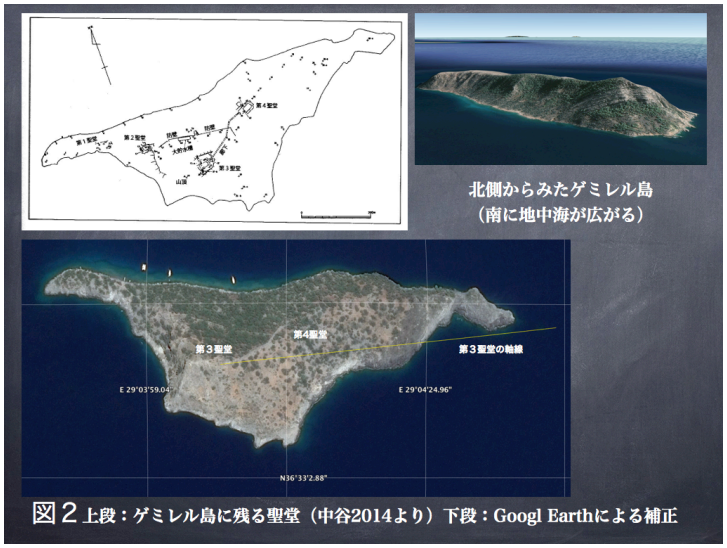

図２ 上段：ゲミレル島に残る聖堂（中谷2014より）下段：Googl Earthによる補正

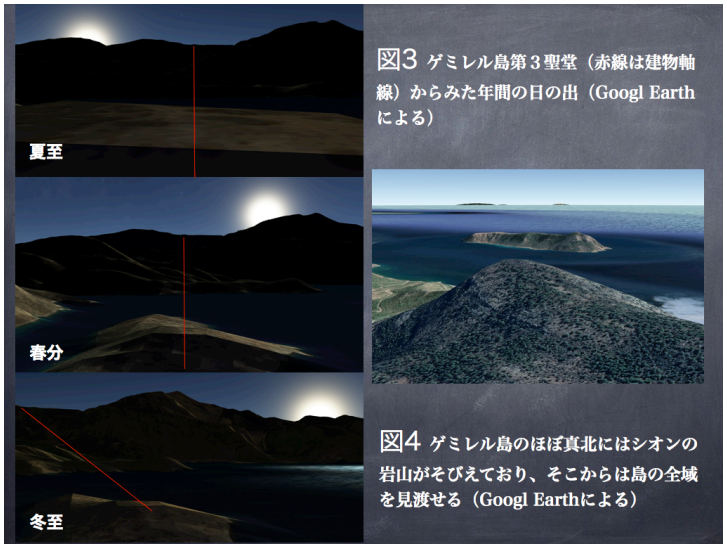

図3 ゲミレル島第３聖堂（赤線は建物軸線）からみた年間の日の出（Googl Earthによる）

図4 ゲミレル島のほぼ真北にはシオンの岩山がそびえており、そこからは島の全域を見渡せる（Googl Earthによる）

ら春分と秋分の日の出方位に近いところとなります。夏至や冬至とは無縁にみえますが、真東からの微妙な振れが意味するところを絞り込むのは大変そうに思います。とはいえ図３に示した情景も、ここで行われた祭祀において、意味あることだったのかもしれません。

ちなみに一昨日、古代キリスト教迫害史を専門とする若手研究者に古い教会の方位について聞いてみました。彼も教会の多くが東西に軸線をもつことは知っていました。朝日の昇る方位に向けた礼拝堂の配置であると聞くこともあるようです。ただしキリスト教が迫害を受けた西暦３世紀までは、彼ら教徒は地下に潜伏し聖堂を建てるどころではなく、最古級の教会遺跡を点検するなら４世紀以降の地中海のリキア地方だろう、というのです。私が偶然参加することになった、ゲミレル島やその近隣にある教会跡も有力な候補地ではないか、というのです。このコメントには参りました。

現地に立っていたはずなのに、しかも作図に加担した当事者の一人だったのに、肝心な方位には無頓着だった25年前の私自身に苛立ちを覚えています。

このような次第で、サンタクロースと太陽の関係については今後の宿題となります。ただし冬至とクリスマスの他にも、キリストの誕生をめぐっては気になることがあります。それは聖母マリアが太陽の精を受けてイエスを妊娠したという伝説です。いわゆる感光受胎が登場してくる背景をどう考えるかです。

先にみたように、イエスの誕生は春の４月ないし５月だったとするのが最も古い記録のようですが、公認後に付加された説話だと処理することで済ませられるのかどうかが気になります。いうまでもなく感光受胎は太陽信仰そのものですし、キリスト教にとっての天は太陽だったことを意味しかねない説話だからです。あるいは布教をめざす先の土着信仰との摺り合わせが目論まれ、感光受胎を挿入することによってイエスと太陽とを同一視させたのでしょうか。邪教に不寛容なキリスト教というイメージが崩れそうになります。

この問題に関連して、遠藤周作が描いた切支丹弾圧の物語が想起されます。遠藤原作の映画「沈黙」において、日本列島の中世後期にキリスト教へと改宗した人びとは、イエスに太陽を重ね「大日様」として崇めた様子が描かれているからです。この地に到達したイエスは大日様の化身＝本地垂迹だというわけです。土着の宗教に重ねることで布教を成功裏に収めようと目論んだ仏教とも親和性のある営為だというほかないようです。なるほど、だからイエスにも如来仏にも背後には必ず後光が描かれるのですね。